材木屋がつないだ人の輪 ——岡部材木店をめぐって

人間ネットワークによる家づくり

岡部知子

出会いから家づくりへ

私の関わった，いくつかの家ができあがりました．　字や絵に性格が表われるのと同じように，家を見てもそこに関わった人の気持ちや指向が感じられるような気がします．

土壁の地域的な色の違いから，土の質まで覚えきれないほど教えてくれた人，素晴らしい建具を見ると形や名称，歴史まで教えてくれた人，古い洋館や民家の見学会で，それに関わる色々なことを教えてくれた仲間たちが，素晴らしい家を造ってくれました．　全員の共通点は気持ちがいいことです．　ですから一緒に学んだり，楽しんだりできたのです．　自分の携わっている仕事に情熱を燃やし，木造の家づくりに立ち向かっているわけですから，話をしてもらうと中途半端ではありませんが，疑問を持って対すると，私にでも分かるように答えてくれます．

すると建築を色々な視点で見ることができ，私の好奇心はますます広がっていくのです．

一緒に楽しむということは，仕事を離れた貴重な時間を共有するということです．　それはどこかで同じ活動を続けることにも共通します．　出会った人の中には，材木屋として「木は，こうして使ってもらった方がいいのですが」などというと「材木屋のくせに設計に口を出すのか」「材木屋が生意気だ」最後には「女のくせに……」という言葉や陰口が返ってくる人もいました．　そうなってしまうと理想を求めてもそこで終りですが，木のことは材木屋に聞いて，少しでも図面に反映させようという人もいるのです．　良い仕事仲間というのは，仕事のできがすばらしいことは当然としても，うそや裏切りがないこと，そして自分大事だけではなく，一緒に仕事をした仲間のことを思いやれるような人々です．

何かにつけ「材木屋は，すぐにお金の話をする」と言われたりしますが，お金のことを避けてきれいごとばかりを並べ，他の人におんぶにだっこでは，本当の意味での良い仕事にはなりません．　一人が満足しても，信頼して一緒に仕事をしてきた人に対し，煮え湯を飲ませるような結果になったのでは，次の仕事には結び付くはずがありません．

喜びは人のつながりから

世の中には，家づくりをしっかりと考えていきたいと思っている人達が沢山います．　私たちを紹介した数分間のテレビの番組や雑誌の数行の記事を見ただけで，「きちんとした木造の家を作りたいんですが」と遠くからも相談に来られます．

そういう方に，初めは設計者や施工者を紹介しているだけでしたが，やはり責任を持って竣工まで見守りたい，喜んでもらえる家に，と思うようになりました．

相談の内容，相性なども考え，一番適切な人を紹介しても材木屋としての関わりがない時もありますが，家を求めている人達に橋渡しをすることによって喜んでもらえるのは，材木屋としてというよりも，自分自身の生き方として嬉しいことです．　善意で紹介されるのなら，誰もが最大限いい仕事をしていこう，という気持ちになるはずです．　人のつながりはお金では買うことはできません．　いい家づくりは，やはり良い関係の人間の輪からです．　そこに関わった人に「いい家になったから是非見に来てください」なんて言われると，とっても幸せな気持ちで「必ず行きます」なんて答えてしまうのです．

特別なことをしたいのではない，きちんとしたことをしたいだけ

友人には「何も知らない人ほど怖いものはない」と笑われますが，営業のために外に出るまでは設計者の知り合いはいませんでしたし，設計者を「○○先生」と呼ぶ習慣を知りませんでしたので，今思うと失礼な発言があったかとも思います．

設計者に対し大工さんや工務店の人は「○○先生」と雲の上の人を扱うように会話をしているわけですが，設計者がいないときに非難の声を聞くこともあります．　設計者側からも，図面どおりにしないとか，言っていることを理解しないなどの声が聞こえてきます．　本当は誰よりも連帯し合わなくてはいけないのに，とても悲しい気持ちがします．

建主にとって設計事務所の門を叩くのは

▲一般には使われない広葉樹から製材された尺角材を天然乾燥している（写真提供＝岡部材木店）

かなり勇気のいることらしいですし，近くの大工さんを訪れて気持ちが合わなかった場合に断わりにくい．　どこへ行けばいいのかと迷ったとき，行きやすいのはやはり大手ハウスメーカーの展示場のようです．　そうではないものを求めるたくさんの人に答えていくには，住宅建築に携わっているものどうし，誰のために仕事をするのかということに，同じ気持ちでいたい．　お金や自分の満足のためだけのものではいけないと思うのです．自分の仕事に対する見返りは当然のものですが，目に見えない搾取や，不当な見返りの要求は目的に反します．　家づくりを考えている人が，気軽に相談できる接点を作り，人もお金も，建築のブラックボックスといわれている部分を可能な限り透明にしていきたいのです．

必要不可欠な人だけが互いの顔の見えるところで仕事をしていけば，それぞれの素晴らしい提案が聞けるはず．　設計するにあたっての思い入れ，デザインもあるでしょうが，限られた予算の中での話ですから，合理的に，経済的にと思うと異業種の知恵を借りたほうが，良い家づくりになるのではないのでしょうか．　また次の仕事を，ともに待ち望むようにならなくては次への発展はもちろん，良い関係を持続することはできません．　大事なのはその素材を吟味する人，施工する人達がどういう家づくりを望んでいくのかということです．　職種は超えられませんが，みなが提案し，仲間や建主の顔を思い浮かべながらの仕事となれば，その家づくりは大成功なのだと思います．

私は設計することも，施工することもできませんが，だからこそ人と張り合わず，客観的に人の素晴らしさを感じられます．お互いを認めあいながら，自分にしかできないことを見つめ，目的に向かっていく．　そんな人の輪が広がっていけば，遠い将来にわたって大事にしてもらえる家が作られていくのではないのでしょうか．　古い民家のように，長い時を経ても愛され続ける家づくりができたらいいと思うのです．

おかべ・ともこ

▲200年以上の国産杉材から，玉切りされた末口40cm以上の節のある部分（写真提供＝岡部材木店）

見捨てられた丸太に拾われた私

岡部 馨

私は，十年ほど前から材木屋家業のかたわら，いらなくなった丸太を使ってチェーンソー彫刻を始めたのですが，この作品が人気で，野外美術展に出したり，欲しいという人にあげたりしていました．

もともとは，一般建築に向かない丸太がチップになったり，腐ったりするのがかわいそうだったので，これを何とかしたいと思ったのがきっかけです．

私の仕事は，製材所の仕入れ係ですが，原木市場に行くたびに，そういったかわいそうな運命の原木達に出会います．黙って見逃せばいいものを，それができずに，ついつい買ってしまう．　その繰り返しで丸太の大きな山が三つ，四つと生れてしまいました．　とても彫刻に使ってどうにかできる量ではありません．

そのうち，人目にもつくようになり，皆に「あんなもの集めてどうするんだ」と笑われたり，親父からは，「お前，何考えているんだ」と怒鳴られたり，だんだんプレッシャーがかかってきました．

それでも懲りずに買い続け，丸太の山はどんどん増えていきました．　しまいには自分でも怖くなってきました．

「……どうしよう」丸太は雨に濡れると腐っていきます．　「……どうしたら，いいんだろう」．　そしてある日，ひらめきました．　屋根を掛ければいい．

そうです．　かわいそうな運命の丸太のために，家を造ってあげればいい．　そうだ，この丸太を使って家を建てればいい．

ちょうど工場でも，木を使った家づくりを目指す人達が，集まっているころでした．　この人達に「かわいそうな運命の丸太達」で家を造るということを提案すれば，この丸太達は第二の人生を送ることができるのです．　しかし，これを実現するのは大変なことで，丸太の量は家にして十棟分以上あります．　ああしようか，こうしようか，策を練り始めました．　とにかく丸太を製材して乾燥させておかなければなりません．

実は私は，高校生時代から民家が好きで，絵に描いたりしていたのですが，「なぜ，民家が好きなのか」という，当時はあまり意識していなかったことをテーマに，丸太を眺めてみました．　その結果，丸太が気持ちよく第二の人生を送れるような家を前提とした，製材方法や，構造材の提案を思いつきました．　そして，何と三年間で九つの家が実現しました．

それは，どれも想像以上に生き生きとした，現代の民家の新築でした．

見捨てられるはずだった丸太達は，輝いて第二の人生を出発することができたのです．

おかべ・かおる